

中学校事例2

防災教育をとおして実感させる命の大切さ

加古川市立山手中学校第2学年

1 テーマ

防災教育をとおして実感させる命の大切さ - 防災教育と命の教育との融合を図る -

2 実践のねらい

阪神淡路大震災の学習をとおして、防災の大切さや命の重みを実感するとともに、よりよい地域づくりのため、今自分たちにできることを考え、実践していける力を身につける。

3 テーマ設定の理由

(1) 本校の概要と児童生徒の実態

本校は加古川市の北部に位置する創立60周年を越える歴史ある学校である。学校の周辺は、田園地帯が広がる自然豊かな地域で、学校周辺には福祉施設が多く、校門前には病院、北隣には知的障害者支援センター、東隣には保育園とデイ・ケアセンター等があり、それらの施設の協力を得て福祉教育に力をいれてきた。

生徒たちは、全般的には辛抱強く言われたことは最後までやり遂げようとするが、自分から進んで何かを成し遂げようとする自主性に乏しい面がある。

そこで、総合的な学習の時間を活用して班別自主学習に取り組み、阪神淡路大震災をテーマに、実体験としての大震災が薄れていく中、より深く防災の大切さを理解し、命の重みを実感できるようにするため、本実践に取り組んだ。

(2) 指導のポイント

【感動の体験】

- ・被災された方から、震災当時の悲惨な様子や、その後の復興の苦労について教えていただき、震災の恐ろしさや命の重みを実感し、今生きていることの素晴らしさを感じさせる。
- ・救命救急法やボランティア体験を通して、生徒自身が人のために出来ることを実感させる。

【感性を育む】

- ・被災された方の話から、防災の大切さを知り、防災に関して自分たちにできることを考え実践する。その活動をとおして、「命の大切さ」「協力の大切さ」「地域とのつながりの大切さ」などを実感させる。

【想像力の育成】

- ・自分と周りの人たち（家族・友人・クラスメート・地域の方々等）との関係を見つめ、よりよい人間関係を築いていこうという意欲を持たせる。

4 事前

(1) 先生の準備

- ・「人と防災未来館」への下見を含め、阪神淡路大震災について深く理解する。震災等で家族を亡くすなど、現在悲嘆にある子どもが存在する可能性があるため、個別に話を聞く時間を設定するなど、事前事後の個別指導を充実させる。

(2) 教育課程上の位置づけ

- ・道徳
- ・総合的な学習の時間

(3) 子どもたちの準備

- ・周りの人から阪神淡路大震災についての話を聞かせてもらう。

(4) 家庭・地域との連携

- ・市民救命士の講習について加古川市消防署と打合せをする。

・ボランティア活動について、地域の役員や周辺の福祉施設職員と打合せ、協力依頼をする。

5 本校の実践の特色

本校では、総合的な学習の時間を使って、地域との交流を深めている。1年生では「高齢者との交流会」「地域を探る・地域を歩く」と題して、校区の歴史や文化遺産について地域の方々から教えていただいている。2年生ではその活動を広めて、「神戸での校外学習」、そして発展として「市民救命士講座」・「ボランティア活動」、3年生の長崎での修学旅行でも、地元の人との交流を持ち「長崎市内での総合学習」・「長崎市立淵中学校との交流会」を行っている。そして3年間のまとめとして、地域に住む「高齢者訪問」を行っている。

このように教室を出て、教師だけでなくいろんな方と出会い、いろんなことを吸収していこうという活動を生徒たちに体験させるように計画している。こうした活動をととして、初めて出会う方々に対しても、マナーを守り積極的に発言できる力、相手が気持ちよく話ができるように聞く力、教えていただいたことへの感謝の気持ちが持てる生徒に育ててくれることを願い計画を進めている。



1・17 山手のつどい



神戸校外学習



ボランティア活動

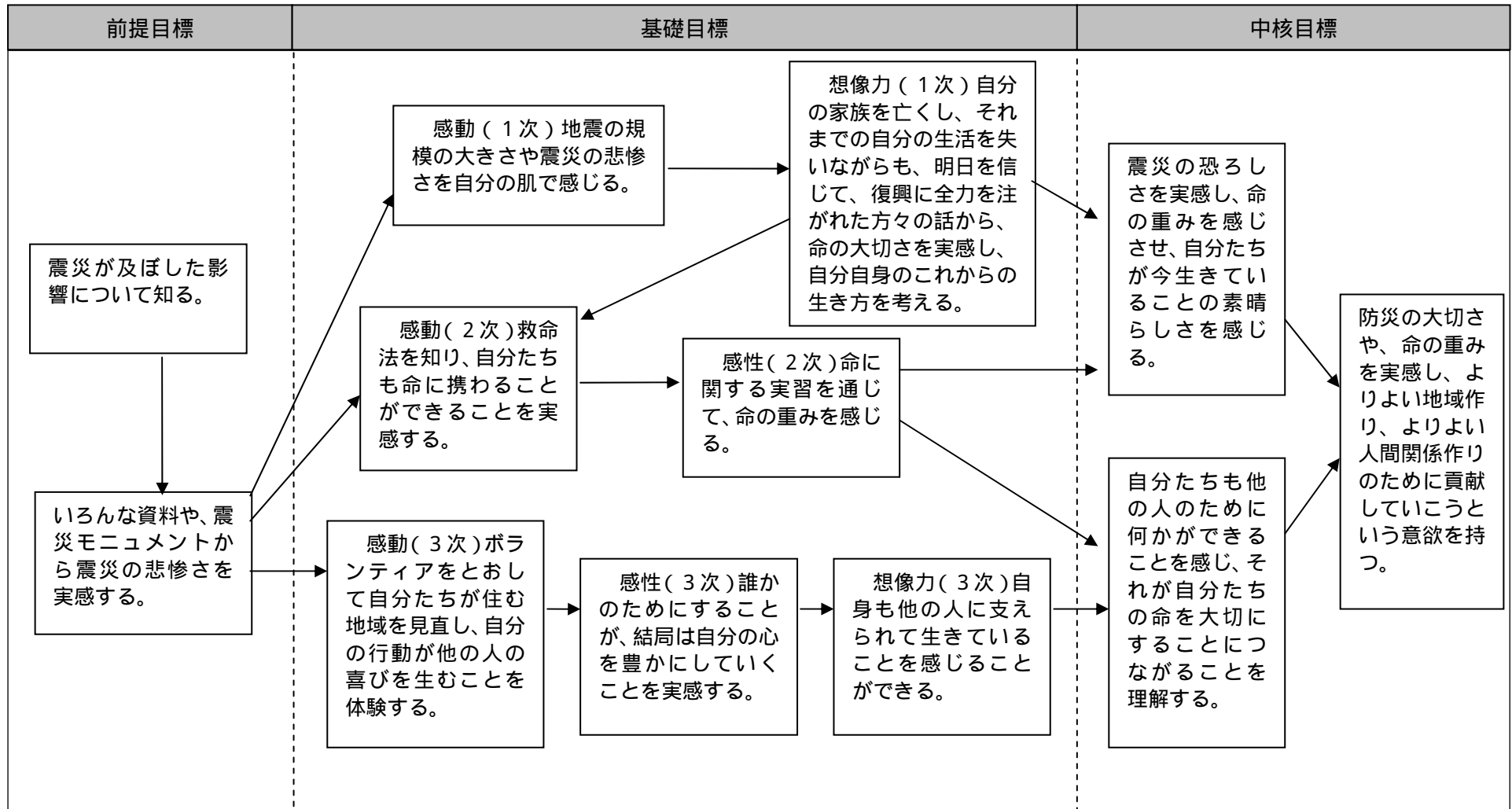


市民救命士講座

6 目標分析表

	学習活動	感動の体験	感性を育む	想像力の育成	先生の振り返り
事前	『阪神大震災ノート 語り継ぎたい。命の尊さ - 生かそうあの日の教訓を』を読む。	震災が及ぼした影響について知る。	震災を体験した人から話を聞いておく。	震災によって、人はどのような思いをしたのか考える。	
1次 (12時間)	阪神淡路大震災で被災された方々の気持ちを考える。 震災モニュメントを見学し、被災された方からの「聞き取り体験」をする。 「聞き取り体験」をまとめ、学年発表会を行う。	地震の規模の大きさや震災の悲惨さを自分の肌で感じる。 被災された方々の辛さや大変さを感じ取る。 震災に負けず、精一杯生きようとする事の大切さを実感する。	身近な人を亡くした死の悲しみの深さを思いやり、命の重みについて考えることができる。	自分の家族を亡くし、それまでの自分の生活を失いながらも、明日を信じて、復興に全力を注がれた方々の話から、命の大切さを実感し、自分自身のこれからの生き方を考える。 震災についての多様な受け止め方があることに気づく。	震災の恐ろしさを実感し、被災された方の気持ちを考えさせることができたか。 震災に負けず、精一杯生きようとする事の大切さを実感させることができたか。
2次 (4時間)	自分たちに今できることを考える。 消防署の方から市民救命士の講習を受ける。	止血法、人工呼吸、心臓マッサージの方法、AEDの使用法などを知り、自分たちも命に携わることができることを実感する。	命に関する実習を通じて、命の重みを感じる。	災害時や緊急時を想定し、その場面で困っている人のために何かをすればよいか考えることができる。	救命実習の重要性を理解し命の重みを感じさせることができたか。 自分たちも命に携わることができると感じさせることができたか。
3次 (8時間)	ボランティア体験をする。 ボランティア体験をまとめ、そこから得たもの、これからできることを考える。	ボランティア体験を通して自分たちが住む地域を見直し、自分の行動が他の人の喜びを生むことを実感する。	誰かのためにすることが、結局は自分の心を豊かにしていくことを実感する。	自身も他の人に支えられて生きていることを感じることができる。	他の人のために何かができることの喜びを感じさせることができたか。 自身も他の人に支えられて生きていることを感じさせることができたか。
4次 (5時間)	今までの学習を振り返り、今後どのような取組ができるかを考える。 「1・17山手のつどい」 「2年総合学習まとめの会」	命の尊さ、思いやりの心、協力して生活することの大切さを実感する。 震災の恐ろしさを実感し、命の重みを感じさせ、自分たちが今生きていることの素晴らしさを感じる。	震災をテーマにした壁画作りや、震災への思いを込めたランタン作りをとおして、命のかけがえのなさを実感する。	自分たちも他の人のために何かができることを感じ、それが自分たちの命を大切にすることにつながることを理解する。	防災の大切さや、命の重みを実感し、よりよい地域づくり、や人間関係づくりのために貢献していこうという意欲を持たせることができたか。

7 目標構造図



(凡例) 感性(1次):「 」は指導の順路、「感性」は指導の観点が「感性を育む」、「(1次)」は学習活動が「1次」であることを示す。

8 事前の教員研修と指導の概要

(1) 事前の教員研修

研修内容	
a	大震災で被災された方の当時の様子を知るための研修 ・住田功一『阪神大震災ノート 語り継ぎたい。命の尊さ - 生かそうあの日の教訓を』を使って震災当時の様子、被災された人々の人生を知る。
b	阪神淡路大震災についての研修 ・ビデオ「震度7・阪神大震災の教訓 ドキュメント神戸 72 時間の記録」(NHKビデオ)を鑑賞し、震災当時の様子を再確認する。
c	大震災からの復興についての研修 ・岩波ジュニア新書「神戸 震災をこえてきた街ガイド」を使って、復興の様子を知る。
d	市民救命士についての研修 ・市民救命士のシステムや心肺蘇生法・AEDについて理解する。
e	ボランティアについての研修 1 ・『知っていますか？ ボランティアと人権一問一答』(解放出版社)を使って、ボランティアについて理解する。
f	ボランティアについての研修 2 ・地域の福祉施設・病院・ボランティア団体等と連絡を取り、ボランティアの状況について知り、中学生がどのように参加できるかを考える。

(2) 指導の概要 (全 29 時間)

研修内容		
事前	朝の読書の時間を活用 ・『阪神大震災ノート語り継ぎたい。命の尊さ - 生かそうあの日の教訓を』住田功一(一橋出版)を学年の生徒全員が読む。 (1時間)	教員研修 a
	阪神淡路大震災について理解を深める。 1 震災当時の映像が収められているビデオ「震度7・阪神大震災の教訓 ドキュメント神戸 72 時間の記録」(NHK「震度7・阪神大震災の教訓」制作委員会)を鑑賞し、地震直後の被害状況・災害救助の模様について知る。 (1時間) 2 聞き取り調査に向けて、被災された方への質問事項を考える。 映像の中で、崩れた家や火災の様子から、その場に居られた方の気持ちを想像する。また、現在の様子を写真などで見せ、ここまでの復興の苦労を想像させる。(事前にこの質問事項を被災者の方に送っておき、それをもとに話をしていただく。) (1時間)	教員研修 b
1次 (12時間)	3 神戸への校外学習 (1) 神戸三宮の東遊園地からメリケンパークの震災モニュメントを見学する。 (2) 「人と防災未来館」の見学をする。 (3) 神戸市長田区(神戸市長田区の新長田駅周辺・高速長田駅周辺)での震災に関する聞き取りを15グループに分かれて行う。 (6時間)	教員研修 c
	4 聞き取り体験をまとめる。 聞いたこと・見たこと・わかったこと・そこから感じたことなどに分けて、まず個人でまとめ、それをもとに班で発表できるように準備する。 (2時間)	
	5 学年で発表会を行う。 体育館で学年集会を開き、「聞き取り体験」で、教えていただいたこと、それに対して感じたことを班ごとに発表していくことをとおして、各自が聞いたことを共通体験へと広げる。保護者も発表会に来ていただく。 (2時間)	

<p>2 次 (4 時間)</p>	<p>中学生として自分たちが今できることを考える。</p> <p>1 1 次の経験を通して、中学生として自分たちが今できることを考える。 ・実際に負傷した人を目の前にした時に、援助できる技術を身につける。 ・阪神淡路大震災で活躍したボランティアを自分たちでもやってみる。 (1 時間)</p> <p>2 消防署のレスキュー隊の方に来ていただき、ビデオ等を使って講習を行う。 (1 時間)</p> <p>3 クラスごとに、レスキュー隊の方から実技講習を受ける。(止血方法・人工呼吸・心臓マッサージ・A E D の使用法) の実技講習を受けて、市民救命士の資格を取得する。 (2 時間)</p>	<p>教員研修 d</p>
<p>3 次 (8 時間)</p>	<p>ボランティア体験をする。</p> <p>1 ボランティアについて理解する。 ・資料等をもとに、「ボランティアって何か?」「どんな活動があるのか?」「ボランティアをするうえでの注意点」について理解する。 (1 時間)</p> <p>2 自分がやってみたいボランティアを考える。 ・「地域の清掃」「福祉施設や病院でのお手伝い」「高齢者宅訪問」「地域でボランティアを継続している方にインタビュー」「地域の問題点について地域の方にインタビュー」などの中から考える。 (1 時間)</p> <p>3 ボランティアを行うために準備する。 ・自分たちで選択したボランティアごとのグループで、行きたい所に連絡をとり、具体的に持っていくもの、準備しておくものなどを考える。ボランティア活動場所での留意点の確認、挨拶、お礼の言葉等の練習をする。 (2 時間)</p> <p>4 ボランティア体験をする。 ・平日の午後 2 時間を使って各グループで、安全に留意しながらボランティアを体験する。 (2 時間)</p> <p>5 ボランティア体験をまとめる。 (1 時間)</p> <p>6 クラスで、自分のボランティア体験について発表する。 ・ボランティア体験から得たもの・これからもできることを考える。 (1 時間)</p>	<p>教員研修 e</p> <p>教員研修 f</p>
<p>4 次 (5 時間)</p>	<p>活動を振り返る。</p> <p>1 これまでの活動を振り返る。 ・自分たちが成長できた点は何か。 ・今後どのような取り組みができるかを生徒一人ひとりが考える。 (1 時間)</p> <p>2 「1・17 山手のつどい」 ・1 月 17 日に阪神淡路大震災で亡くなられた方を追悼するための全校集会を開き、これまでの学習の成果を発表する。 ・被災された神戸市長田区大正筋商店街副理事長伊東正和氏の講演を聞く。 (2 時間)</p> <p>3 「2 年総合学習のまとめの会」 ・住田功一さんの講演を聞く。 (2 時間)</p>	
<p>事後</p>	<p>自分の心の動きを振り返り、振り返りカードに記入する。</p>	

9 指導実践

(1) 1次第3時

ア 本時のねらい

震災から立ち直った神戸の街の姿を実際に見るとともに、被災から復興に努力された方の話を聞くことをとおして、命の大切さを実感し自分たちの生き方を考えさせる。

イ 指導のポイント

(ア) 感動の体験

神戸への校外学習をとおして、震災の凄まじさや悲惨さを自分の肌で感じ取らせる。

(イ) 感性を育む

震災モニュメントの見学では、東遊園地の「希望の灯り」「慰霊のモニュメント」、阪神高速の下に残っている高速道路が倒壊した跡、メリケン波止場に残る壊れた岸壁の姿から、地震の恐ろしさや被災された人々の苦勞を感じ取らせる。

(ウ) 想像力の育成

地震によって、自分の家族を亡くされ、それまでの自分の生活を失いながらも、明日を信じて、復興に全力を注がれた方々の話から、命の大切さを実感し、自分自身のこれからの生き方を考えさせる。

ウ 準備物 デジタルカメラ、インタビューカード

エ 先生の準備(事前の打合せと教員研修)

(ア) 被災者の方で、中学生に話をして下さるボランティアの方(神戸市長田区)を探す。

「教師の事前研修C」で紹介した「神戸 震災をこえきた街ガイド」の本を片手に、そこに紹介されている被災者の方を探し、中学生に震災の話をしていただけないかと話してまわる。本を持っていった効果か、時間の都合がつけば快く引き受けてくださった。また、そこから「こんな方も居られます。」と、紹介もしていただき広がりを見せた。ただ15人のボランティアを探し、目的を理解してもらうためには5回ぐらいの下見・打ち合わせが必要であった。

(イ) 神戸三宮東遊園地からメリケン波止場の下見をし、生徒たちが学べる内容を把握する。

三宮の東遊園地で下見をしている時に、神戸市役所24階「協働と参画のプラットホーム」に「神戸観光ボランティア」というのがあり、震災のモニュメントの説明をしてくださるとい話を聞き、連絡を取り案内してもらうことにする。


その際、「協働と参画のプラットホーム」の方に、「震災で生き埋めになり助かった人の何割が、自衛隊や消防士に助けられたかわかりますか？」と聞かれた。答えは「2割以下ですよ。8割以上は地域の人たちが助けたんです。防災には地域の協力が一番大切なのです。」という話を教えていただき、地域の連携の大切さを改めて考えさせられた。

(ウ) 「人と防災未来館」の下見をして、生徒たちが学べる内容を把握する。

(イ) 移動するための交通機関・時間・経路の確認をする。

(オ) 被災者のボランティアの方へ、生徒たちが質問したい内容を送付する。

才 展開

	学 習 活 動	指導上の留意点
導 入	<p>1 学校 加古川駅までバスで移動する。</p> <p>2 JR で三宮へ移動する。</p>	
展 開	<p>3 東遊園地まで教師が引率し、そこから「神戸ボランティア」から、モニュメントの説明を聞きながら、メリケンパークへ向かう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・たった数秒の揺れでこんなにも人が死ぬのかと思った。ぼくはこれを見て『命の尊さ』を学ばなくちゃいけないと思いました。 ・希望の灯りは、きれいに磨かれていて、どれほど大切なものなのかが、わかりました。 <p>4 「人と防災未来館」の見学をする。</p> <p>5 聞き取り体験をする。</p> <p>(1) グループごと(15グループ)に、自分たちが話を聞くボランティアがいる所に行って話を聞く。(神戸市長田区)</p> <p>(2) 2班(約12名)ごとに分かれて、ボランティアの方を訪問する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・こうやって生活できていることに感謝の気持ちを持って、一日一日を大切に生きたい。 ・震災が残してくれたもの、それは人々の優しさや勇気でした。1人でも多くの命を救いたいという気持ちがみんなの心をひとつにしたことがよくわかった。教えていただいた「命の尊さ」を伝えていきたい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・3班(約18人)に1人のボランティアの方について案内していただく。  <ul style="list-style-type: none"> ・4Fの「1・17シアター」から見学させる。 ・教師はポイントに分かれて生徒の動きを確認。
ま と め	<p>6 終了した班からバスの待機場所に向かう。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・聞き取った内容のまとめを次時までにしておくように伝える。

カ 先生の振り返り(次の実践に向けて)

- (ア) 三宮の東遊園地の「希望の灯り」や「慰霊のモニュメント」は生徒に大きなインパクトを与えた。
- (イ) 実際の被災者の方の話はそれぞれにドラマがあり、学年での発表会では、15のグループそれぞれに内容も濃く、大変意味深いものになった。生徒たちも感慨深い感想を多く寄せてくれた。
- (ウ) 何度も神戸市長田区に下見に出かけ、被災者の方からいろんな話を聞かせていただいたことは教師にとっても、大変有益であった。特に、「協働と参画のプラットフォーム」の方に聞いた「助け合える地域づくり」は、学年の総合で取り扱ってきたテーマとも合致するものでもあり、もっと深く取り組んで生きたいという意欲へとつながった。この経

験をこれだけで終わらせずに、次にひろげていきたいと思わせるものに出会えたように感じた。



(聞き取り体験の様子)

キ 振り返りカード

振 り 返 り カ ー ド		
年 組 名 前 ()		
	学習・体験の目標(めあて)	自分の振り返り
感動の体験	地震の規模の大きさや震災の悲惨さを自分の肌で感じることができたか。	
感性を育む	身近な人を亡くした死の悲しみの深さを思いやり、命の重みについて考えよう。	
想像力の育成	復興に全力を注がれた方々の話から、命の大切さを実感し、自分自身のこれからの生き方を考えよう。	
全体を振り返っての感想：		
先生から：		
家庭から：		

(2) 3次第7時

ア 本時のねらい

阪神淡路大震災でのボランティアの活躍が、日本でのボランティア観を変え、1995年が「ボランティア元年」と呼ばれるようになった。生徒たちは震災の被災者の方から、ボランティアの大切さを教えていただき、自分もやってみたい気持ちを持った。ボランティア体験をとおして、自分たちも他の人のために何かができることを実感し、それがみんなの命を大切にすることにつながることを実感させる。

イ 指導のポイント

(ア) 感動の体験

地域の清掃、福祉施設・病院の訪問、高齢者宅訪問などの体験をとおして、自分たちが住む地域を見直し、自分の行動が他の人の喜びを生むことを体験させる。

(イ) 感性を育む

誰かのためにすることが、結局は自分の心を豊かにしていくことを実感させる。

(ウ) 想像力の育成

自身も他の人に支えられて生きていることを感じさせる。

ウ 準備物 なし

エ 先生の準備(事前の打合せと教員研修)

生徒たちの受け入れ施設との綿密な打合せをする。

- ・ボランティア体験の内容の確認
- ・受け入れ人数の確認
- ・活動場所の確認

オ 展開

	学 習 活 動	指導上の留意点
導 入	1 本時の授業の流れを理解する。	・ボランティアをしたグループごとに、自分たちが体験したこと・感想などを順番に発表させる。
展 開	2 グループでボランティア体験について発表する。 (1) 地域の清掃班:12ヶ所に分かれて実施 ・ボランティアは、自分にプラスになる。 ・するほうもされるほうもすっきりした気分になる。 ・ボランティアは楽しい。 (2) 福祉施設・病院訪問班:高齢者施設6ヶ所、病院1ヶ所で実施 ・互いの笑顔で、嬉しい気持ちになれた。 ・心のこもった「ありがとう」の言葉をもらえて疲れが吹っ飛んだ。 (3) 高齢者宅訪問:11名の高齢者を訪問 ・小さなボランティアでも、喜んでもらった。 (4) 地域でボランティア活動をしている方を訪問した班 ・小さなことも自分からすると大きなボランティアになる。	・人に奉仕して、喜んでもらうことは自分自身の喜びになり、自分自身の成長につながっていくものであることを、体験をとおして、自然と感じさせたい。 ・ボランティアを長年続けておられる方も、相手の笑顔や優しい気持ちが得られるから続けておられることをおさえる。 ・ボランティアは、肩肘張ったものではなく、少しでも人のためになるという気持ちで、できる時にできる事をするものである。そのことが結局自分のためにもなることをおさえる。

展 開	<ul style="list-style-type: none"> ・相手の気持ちを考えてから行動すること。 ・自分にできることを、自分ができるときにすればいい。 <p>(5) 地域の問題点としてわかったこと</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ごみのポイ捨て。 ・犬のふんの放置。 ・自転車通学生が広がりすぎて困る。 ・地域活動に参加する人が減ってきた。 ・若い人が減り、祭りなどの伝統が衰退。 ・一人暮らしのお年寄りが増えている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・地域の問題点を知り、自分たちのできることから実践していけば、この地域がもっといい地域になっていくこと、一人ひとりがそういう力を持っていることに気づかせる。
ま と め	<p>3 地域の問題を知り、今回のボランティア体験を発展させて出来ることを考える。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ボランティア体験で終わることなく、ボランティアを続けていくことの大切さをおさえる。

カ 先生の振り返り(次の実践に向けて)

- (ア) 実際にボランティアを体験することによって、生徒たちはいろんなことが学べたように思う。生徒の感想として、「とてもすがすがしい気分になりました。ボランティアで大きなものを得ることができました。」「一番感じたことは、相手の気持ちを考えて行動することの大切さです。日頃の生活でも気をつけていきたい」などがあつた。
- (イ) しかし、一回だけの体験で、本当のボランティアの意味は理解できないであろう。これからも、このような体験を継続していくことが必要である。だが、第1学年の生徒全員を動かすため準備には教師側の多大な労力が必要であるし、中学生も部活動・塾と忙しい生活をおくっているものが多数であるので、活動を継続していくためには時間・活動内容等の調節が大変難しいのが実情である。
- (ウ) 中学生が気軽に参加できるボランティア、そういうものを紹介してくれる行政側の協力が必要ではないだろうか。小中学生の頃から身近にボランティアを感じることで、本当のボランティア精神を根付かせることになると思う。

キ 振り返りカード

振 り 返 り カ ー ド		
年 組 名 前 ()		
	学習・体験の目標(めあて)	自分の振り返り
感 動 の 体 験	ボランティア体験をとおして、自分たちが住む地域を見直し、自分の行動が他の人の喜びを生むことを実感できたか。	
感 性 を 育 む	「誰かのため」が「みんなのため」につながることを実感できたか。	
想 像 力 の 育 成	自身も他の人に支えられて生きていることを感じる事ができたか。	

全体を振り返っての感想：

先生から：

家庭から：



(地域清掃1)



(地域清掃2)



(高齢者宅訪問)



(病院訪問)

(3) 4 次第 2 時

ア 本時のねらい

兵庫県で起こった阪神・淡路大震災を風化させることなく、そこから学んだ「命の尊さ・思いやりの心・協力して生活することの大切さ」等を確認する。

イ 指導のポイント

(ア) 感動の体験

震災を体験し、店が全焼し、路上で毛布をかぶりながら商売を再開するなど、いろいろな困難を乗り越えてこられた伊東さんの講演を聞く。

(イ) 感性を育む

会場の体育館を飾るための、震災をテーマにした壁画作りや、震災への思いを込めたランタン作りを通して、防災への思いを強くする。

(ウ) 想像力の育成

実際に自分たちがそういう状況に陥ったら、どのような行動が取れるかを考える。

ウ 準備等

ビッグアート 1 年 (震災で亡くなられた人々の顔)

3 年 (震災をテーマにクラスごとに作成した壁画) (1・3 年職員・生徒)

ランプシェード 2 年 (2 年職員・生徒)

キャンドルパネル・キャンドル・希望の灯り (2 年職員・生徒)

体育館準備 (椅子・看板・マイク・防災学習の写真) (2 年職員・生徒)

進行・司会・お礼の言葉・花束・講師紹介 (生徒会)

2 年生の防災学習の取り組みの発表原稿 (2 年生徒・職員)

誓いの言葉 (学年代表生徒・各学年防災担当教師)

エ プログラム

1・3 年生の入場

2 年生の入場 (希望の灯りを分灯しながら、大きなキャンドルアート「1・17」を作る)

開会のことば (生徒会)

2 年生の防災学習の発表 (2 年生代表)

講師の紹介 (生徒会)

講演「大正筋商店街副理事長 伊東正和さんー出会い・助け合い・愛」(約 50 分)

お礼のことば (生徒会)・花束贈呈 (生徒会)

誓いのことば (1・2・3 年生代表)

閉会のことば (生徒会)

オ 先生の振り返り

(ア) 今年の「山手のつどい」は、地域の方にも地区の回覧板でお知らせしたり、公民館の協力もあって、一般の方も 60 名参加して下さる盛会となった。体育館の壁面を飾った 1・3 年生が制作したビッグアート、2 年生のランプシェード、ともに力作で会場を盛り上げた。

(イ) 伊藤さんの講演はとても感動的で、生徒たちの感想も「涙が出ました。伊東さんの話を聞いて本当に良かったです。毎日、毎日を感謝しつつ、大切に生きていきたいです。」「私の大切な人はたくさんいます。そんな人たちが居てくれたから私はいる。本当にありがとう！そう思いました。」などの意見があった。学校そして地域も含めて、災害の恐ろしさを実感し、そこから学んだものを語り継いでいこうという良い機会になった。

(ウ) 震災から 10 年以上がたち、新しく入学してくる中学生は、全く震災を知らない子どもたちも増えてくる。「山手のつどい」も形を考えながら、震災の記憶を時代とともに風化させることなく、震災の与えた教訓「命の尊さ・思いやりの心・協力して生活することの大切さ」を伝えていかなければいけないという思いを新たにしたい。



「1・17山手のつどい」で作った、壁画とランプシェード

カ 振り返りカード

振り返りカード		
年 組 名 前 ()		
	学習・体験の目標(めあて)	自分の振り返り
感動の体験	阪神・淡路大震災の教訓「命の尊さ・思いやりの心・協力して生活することの大切さ」について考えよう。	
感性を育む	会場の体育館を飾るための、震災をテーマにした壁画作りや、震災への思いを込めたランタン作りをとおして、防災について考えよう。	
想像力の育成	実際に自分たちが震災等の状況に陥ったら、どのような行動が取れるか、またどのような考えを持てるかを考えよう。	
全体を振り返っての感想：		
先生から：		
家庭から：		

10 実践を終えて

(1) 先生の振り返り

一連の学習を終えての生徒の感想として、

- ・「人の気持ちが考えられるようになり、命の大切さを実感できたと思う。人の役に立つのは気持ちのいいことだとわかりました。」
- ・「普段できないような体験ができ、そのような環境を作って下さった方々への感謝の気持ちが持てるようになりました。また、「命」について多くのことを学びました。今、こうして生きていられるのも周りの人のおかげだなあと、感謝する気持ちが持てました。」
- ・「私たちがいろんな場所でいろんな場所でいろんな事を学んでいるのは、きっと全て命につながっているのだらうな。いろんな奇跡を、良い方向につなげるために学習している。何もせず、ただ生きるより、何かを残し、何かを受け取り、何かを生み出していける人生を過ごすための学習をどんどんとしたい。」などがあった。

このような感想を生徒が書くということは、教師にとってこのうえない喜びである。ここまで考えている生徒が存在するだけで素晴らしいことだと思う。生徒たちがこのように考えた理由は、「体験」である。机上の学習では、一教師の言葉だけでは、ここまで考えられることはできないであろう。私自身も、この学習のために阪神淡路大震災の被災者の方、消防署のレスキュー隊の方、地域でボランティアを続けておられる方や福祉施設の方々など、いろいろな人に出会い、いろいろな話を聞かせていただいたが、それらはすべて自分自身の宝物になったと思う。「命の大切さを実感する」というのは、言い換えれば「生きていくことの素晴らしさを実感する」ということではないだろうか。いろいろな人との新しい出会い、そして自分の知らなかった世界を教えてもらえる体験、それこそが「生きていくことの素晴らしさ」。バーチャルな世界を得意とする今の中学生にとって、生の体験、これこそが「生きていくことの実感」つまり、「命の大切さ」の実感の根本だと思う。

(2) 今後の課題

ア 授業実践上の課題

聞き取り体験等、教師以外の方に教えていただく場面が多いので、生徒たちの「聞く姿勢」「質問する方法」「聞きながら記録する方法」の育成を平素から継続的にしておく必要がある。

イ 家庭・地域との連携についての課題

特にボランティア体験は、地域の協力がなければ全く前に進まない。どこで、どのような地域の協力を得たらいいのか、最初は全く分からず、地域の公民館・市の福祉会館内にあるボランティアセンターなどに相談し、地域の連合町内会長、町内会長、老人会の会長、民生委員などの御協力で進めることができた。学校を出て地域の多くの方々と交流する粘り強さと時間をかけることが求められると言えるだろう。そして地域の好意的な協力が不可欠である。

ウ 学校の組織運営上の課題

新しいことにチャレンジするには、学校全体の共通理解と支援がなければ、絶対に進まない。そして、一緒に計画を進めていく同じ学年担当教師集団のコンセンサスがどこまで得られるかがその計画の質を決めていくと言っても過言ではない。

11 参考・引用文献

- ・早瀬昇・牧口明『知っていますか？ボランティアと人権一問一答』解放出版社 1997
- ・島田誠・森栗茂一『神戸 震災をこえてきた街ガイド』岩波ジュニア新書 2004
- ・住田功一『阪神大震災ノート 語り継ぎたい。命の尊さ』一橋出版 2004
- ・ビデオ「震度7・阪神大震災の教訓 ドキュメント神戸72時間の記録」(NHKビデオ)